

# ベルギー留学体験記

ルーヴァンカトリック大学 (Université catholique de Louvain) 堀内 あきな

HORIUCHI Akina

キーワード: ベルギー留学、海外生活、社会人留学

## はじめに

私は現在ベルギー、ルーヴァン=ラ=ヌーブ市にあるルーヴァンカトリック大学理学部化学科でアシスタントとして働きつつ、博士課程に在籍して有機化学分野での博士号取得を目指して研究をしています。ベルギーには今回の留学の前、京都大学在学中にもナミュール大学へ6ヶ月間の留学をしました。今回、ベルギー留学のきっかけから、留学準備、ナミュール大学での短期留学、そして現在のルーヴァンカトリック大学での正規留学、研究生活についてご紹介したいと思います。

## 1、ベルギー留学のきっかけ

京都大学修士課程在籍中に参加した有機化学の国際学会でナミュール大学の Alain Krief 先生とお話する機会に恵まれ、研究分野が近かったことや海外留学をしたいという話をしたところ、ではぜひ研究室に来るよという話になり、修士2回生のとき6ヶ月間ナミュール大学の研究室にて共同研究を行いました。その後、Krief 先生からはぜひベルギーで博士課程に進むよという話をいただいたのですが、当時は就職活動も終わっており、1年間社会人生活を経験しました。当時働いていた会社が外資系であり、研究職として働くには Ph.D をもっていたほうが有利なことが多いと実感したため、再度 Krief 先生に相談をし、Krief 先生は退官が近いということで現在の指導教官であるルーヴァンカトリック大学の Istvan Marko 先生を紹介していただき、現在博士課程の学生として在籍しています。いつか機会があればイギリスやアメリカに留学をしたいと考えていましたが、まさか自分がベルギーにて留学生活を送ることになるとは思ってもいませんでした。何故なら、留学する前はベルギーといえば、チョコレートや美術、音楽といったイメージしかなく、失礼ながら科学技術の先進国というイメージはなかったからです。しかしながら実際には、私の専門とする有機合成においては、Janssen Pharmaceutica や UCB といった製薬会社が研究所を構え、医薬品の研究開発がさかに行われており、化学工業や医薬品製造は国の主要産業となっています。

## 2、ベルギーの博士課程および入学手続き

ナミュール大学に留学した時には、留学中のアパート、役所の事務手続きなどはすべて大学側が面倒を見てくれたため、自分でしたことといえばベルギー大使館で学生ビザを申請することくらいでしたが、今回の博士課程の留学に関しては、交換留学生ではなく正規留学ということ、さらにはアシスタントとして大学からお給料をいただ

くため、学生ビザではなく労働許可証が必要となることなど、留学準備の手続きに時間がかかりました。留学準備をしていた時期はちょうど夏休みの期間でもあり、公式には大学の事務局は開いてはいるものの、連絡をしても返事がなかったり、何度も必要な書類の催促をしたりと、すべてのやりとりに時間がかかり、もどかしく思ったのを覚えています。欧米の大学は秋に始まるので留学の準備をするのは夏休みの期間に重なると思うのですが、ベルギーでは1ヶ月間の休みをとる人も多くその間の引き継ぎがうまくできていなかったり、事務手続きに多大な時間がかかるため、早め早めに準備をするとよいかと思います。博士課程に進学すると決めて、現在の指導教官である Marko 先生を紹介してもらおうとすぐに、研究テーマや滞在費をどうするかについての話し合いをし、研究テーマが決まると大学のアシスタント職に応募するため、学部、および修士の成績証明書、卒業証明書をそろえました。ベルギーでは大部分の博士課程の学生が奨学金かアシスタントとして収入を得ながら研究を続けています。ベルギーでは博士号取得には通常最低4年必要とされますが、アシスタントについては6年間の期間が与えられています。ベルギーでは博士課程に在籍する人のため”アシスタント(Assistante)”という制度があり、学部生の演習や実習を担当する傍らで、博士論文のための研究をする時間が与えられており、給料が支給され、ベルギー社会保険にも自動的に加入されます。私は無事にアシスタントの書類審査、面接に合格したものの授業や実習はすべてフランス語で行われるため、その後は専門の勉強はそっこのけで必死にフランス語の勉強に励みました。フランス語については一応学部1回生の時に第二外国語として選択していたため、一度勉強したことはあったものの、ほとんど忘れた状態だったため、こちらに着いてから2ヶ月間 CLL という語学学校の集中コースを受け、その後大学の博士課程に入学した後も1年間大学での仕事が終わったあと、夜の7時から9時半まで週2回のコースを続けました。

無事にアシスタントとして採用された後、次の困難は Equivalence du diploma という日本で取得した学位がベルギーでの学位と等しいことを証明する手続きでした。これはアシスタントとして採用された場合に、日本だけでなくベルギー国外で取得されたすべての学位にこの手続きが要求され、例えばフランスの大学を卒業した人もこの手続きを経なければなりません。この手続きが厄介なのは、まずすべての成績証明書、学位証明書のフランス語法廷翻訳（成績書が英語でもフランス語の法廷翻訳が必要）、さらには学部、および修士課程で履修した科目のシラバスの翻訳（こちらは法廷翻訳ではなく自分で翻訳したものでよい）を添付するという、書類準備に莫大な時間とコストがかかることです。Equivalence の審査費用は120ユーロほどですが、法廷翻訳に400ユーロほどの費用がかかりました。また単位取得数などすべてをベルギーの制度にあてはめようとするため、非常に苦労した覚えがあります。ヨーロッパの大学間には ECTS (European Credit Transfer and Accumulation System) という制度があるので必要な単位数は明確なのですが、日本の大学の単位数がどのようにカウントされ、どのような基準で審査されているのかがまったくわからず、最終的にはベルギーの理学部の修士課程に相当するとの結果がでたので無事に博士課程に入学できましたが、この審査の期間中（審査に2ヶ月ほど要する）ずっと不安だったのを覚えています。ここまで書くと、博士課程への入学手続きへの不満ばかりですが、この煩雑な

手続きをしてでも入る価値があると思うほど、ベルギーの博士課程はすばらしいと思うことがあります。それは、博士課程は学生というより、“doctorant（フランス語で博士課程に在籍する人の意味）”もしくは研究員といった職業のひとつとみなされ、アシスタントのお給料も通常の会社に就職した場合と同じ程度の金額が支給され、ベルギー社会保険制度にも加入されるため、年金や社会保険において不利になることがまったくないということです。そのため、同僚の中には学生結婚をし、子供がいる人もたくさんいます。

大学の博士課程については、アシスタントとして平均して週に2回ほどの演習と実習を担当する以外の時間は自由に自分の研究をすることができます。私の在籍する研究室では、週に1回2時間ほど全合成の演習、研究発表があります。研究については週に1回ほど指導教官とディスカッションをし、研究の方針を決めています。研究については日本と比べるとだいぶゆったりとしたペースで進めることが出来、自主性が重んじられる自由な雰囲気です。こちらの人はディスカッション好きな人が多いためか、同じラボの人と黒板で問題を話し合っているところに人が加わって議論が盛り上がるが多々あります。

博士課程においては特に必修の授業はないものの、各自選んだ授業を年に3コースほどとることが必要とされています。また入学から18ヶ月以内に博士課程に在学し続けることができるかどうかの判断を指導教官および外部からの3人の教授（入学の時に研究テーマの審査をしていただいた先生方）に仰ぐ審査会があります。この審査会では、まずそれまでの研究について1時間ほどプレゼンテーションをしたあと、1時間ほど厳しい質疑応答があり、自分が博士課程に在籍するものとしてふさわしいことを証明せねばなりません。私の場合には専門の有機化学だけでなく、物理化学や生化学といった他分野に関する質問も多くあり、改めて化学という分野を基礎から見つめ直すよいきっかけとなりました。

### 3. ルーヴァンカトリック大学

私が現在在籍しているルーヴァンカトリック大学は、ベルギーの首都ブリュッセルから電車で50分ほどのフランス語圏の街、ルーヴァン=ラ=ヌーヴにある総合大学です。1425年にオランダ語圏の街ルーヴェン(Leuven)に創立された歴史ある大学ですが、20世紀半ば以降の言語戦争の激化により、新しくフランス語圏にルーヴァン=ラ=ヌーヴ（新しいルーヴァンという意味）という街を作り、フランス語話者の学生や先生が移動しルーヴァンカトリック大学となったそうです。そのためか、ベルギーの他の町と違い、すべての建物がコンクリート作りの現代的な建物であまりベルギーらしさを感じません。また住人の多くが学生や大学関係者であることから学生向けの手頃な軽食屋や飲み屋が多く、学生の町だと感じます。もとは一つのルーヴァン大学ですが、今はオランダ語圏ルーヴェンにあるルーヴェン大学とは大学間のつながりはそれほど強いという印象はなく、むしろ他のフランス語圏の大学間とのほうが、共同研究や学術会議が活発に行われている印象があります。

#### 4. ベルギーでの生活

以前ナミュールに留学した時は、大学が用意してくれた大学のそばのアパートに住み、すばらしい環境で十分に外国での生活を楽しみましたが、日曜にすべてのお店が閉まってしまうことや町が小さいがゆえに休日のアクティビティが少ないことから、今回の留学では首都ブリュッセルに自分でアパートを借りて住むことにしました。ブリュッセルには日本食スーパー、日本食レストランも多くあり、またクラシックコンサートや美術館など文化的なイベントも多くあり、ヨーロッパ連合や NATO（北大西洋条約機構）の本部があることから外国人も多く、プライベートでも充実した日々を過ごすことができ、大変気に入っています。ブリュッセルから大学までの通学は電車を利用していますが、朝夕の通勤通学ラッシュ時でも必ず席があるため、落ち着いて文献に目を通したりと、有意義な通学時間を過ごせるものの、日常的な遅延や理由のない突然の運行休止、年に数回あるストライキにはまだまだ慣れません。外食は日本に比べて若干高いかなと思いますが、食料品の価格などは日本と特に変わらないのではないかと思います。給料の約半分が税金として引かれるだけあり、ベルギーの社会保険は充実しており、歯科を含めて医療費も日本よりだいぶ安く済んでいます。

#### 5. ベルギーの言語事情

ベルギーで研究をするだけなら、英語で事足りますが、やはり現地の言葉を勉強したほうが何倍も生活が楽しくなると思います。最初にナミュール大学に留学した時は基礎的なフランス語しかできなかつたため、先生や研究室の人とのコミュニケーションはもっぱら英語でした。ナミュールはフランス語圏の小さな町で外国人も少ないためか、英語が通じないことが多く、個人商店でものを買うときや郵便局に行くとき、辞書でフランス語の単語を調べてメモ帳に書いてもっていったりしていました。研究室の人はみんな英語ができますが、みんなで食事をするときにはフランス語を解さない外国人がいても気にせずフランス語で話を続けられ、さみしい思いをしたりもしましたが、自分がフランス語を話すようになってそれは悪意があるわけではなく、単に彼らにとって外国語である英語を話すのが面倒なだけなのだわかりました。また、ベルギー人は日本人と少し似ていてシャイなところがあるのか恥ずかしがって英語を話したがる人いません。現在住んでいるブリュッセルでは、大きい病院やコミューン（区役所）や公共サービス以外はほとんどの場所で英語が通じます。

#### 6. 今後の目標

留学後の進路については、博士課程をはじめた当初は博士号を取得したらまた日本に戻り企業で研究をと考えていましたが、現在は、化学の専門知識だけでなく英語、フランス語を生かせる国際機関またはグローバル企業に就職したいと考えています。

#### 7. 留学を志す方へ

近年日本において海外への留学希望者が減少し続けているとのニュースを見かけますが、実際に留学している者として、ぜひもっと多くの若者が外へ出て行ってほしいと思います。私も就職活動などの都合により留学をあきらめかけましたが、偶然に会

議で出会った先生に海外で勉強をしたいという話をしたことから留学への道が開けました。ヨーロッパの理系の学部では、修士課程在学中に企業や他大学の研究室で数ヶ月から1年のスタージュと呼ばれる研修をすることがよくあります。修士の学生さんでもし留学を希望される方は、ぜひ国際学会などに積極的に参加して、研究分野が近い海外の先生に出会ったらスタージュ（研修）をさせてもらえないかと勇気をだして聞いてみるのもひとつの手だと思います。海外で生きていくためには、積極性がとても重要だと思います。こちらの方は気を使って外国人だからと特別扱いはしないですし、言葉ができないからといってだまっていたら、友達もできませんし、話さない事には語学も上達しませんし、何も前に進みません。若いときの苦労は買ってでもせよといわれるように、より多くの学生さんに外に出てもらい、それにより、海外に出ることではじめてわかる日本のすばらしさを知り、また逆に日本が見習うべきことをたくさん学んでほしいと思います。